東アジアにおける海賊・権力・社会

－1350 年～1419 年の日・中・韓を中心に－

INALCO・パリ第四大学 Damien Peladan

「倭寇」と言う歴史的概念は、広義では十三世紀から十六世紀まで朝鮮半島と中国大陸の沿海地域を掠奪していた日本の海賊を表している。三百年と非常に長い期間をまたぐため、現代歴史学では十三世紀～十五世紀を中心とした「前期倭寇」と十六世紀半ばを中心とした「後期倭寇」という時代区分を設けているが、前期は二百年以上の期間を指しているのに対し後期は数十年間しか指していない。しかしながら前期の二百年間、この海賊集団の組織形態や掠奪対象などに全くの変化は見られないだろうか。筆者は修士論文研究に於いて、その変化の有無を明にするため倭寇蜂起の初年に当たる 1350 年から倭寇が十六世紀までほぼその姿を消した年度に該当する 1419 年までの期間を対象に、南北朝時代と室町時代初頭の日本と元朝から明朝への転換期の中国、そして高麗・朝鮮の権力者たちの海賊に対する立場や対応の比較研究を行った。今回は、本調査の結果三つのカテゴリーに分類された「倭寇」と権力の関係に関して紹介する。

先ずは、海賊の活躍がもたらす経済利潤の取得或いは軍事勢力の利用をすべく、海賊集団と連合・結託、或いは指揮する権力者の例を挙げる。次に、海賊鎮圧を努めるそれぞれの権力者の対策を比較する。最後に海賊像の政治的工作、すなわちある権力者が政治的な目標を達成するために海賊たちが大陸で残した恐怖感等を扱うことを説明する。